

全日本実業団女子・高壮年剣道大会

第20回記念大会

平成29年3月4日(土)
東京武道館
主催 全日本実業団剣道連盟
撮影 窪田正仁



決勝

【代表】
宮本(西日本シティ銀行・本店) コー 三好(パナソニック・ES東京本社)

▲両チームゆずらず、勝負は代表戦に。西日本シティ銀行は大将の宮本に、パナソニックは今春入社した新人・三好に命運を託す。試合開始から勢い良く攻めかかる三好に対して、宮本は大技で対抗。機動力に長ける三好に対して決めたのは、つばぜり合いからの巧みなひきゴテだった(写真)

◆決勝

チーム	先	中	大	得点	代
西日本シティ銀行(本店)	久堀	佐々木	宮本	0	宮本
	×	×	×	0	コ
パナソニック(ES東京本社)	竹之内	三好	佐藤	0	三好

代表戦で勝利した宮本をたたえる西日本シティ銀行(本店)メンバー。宮本は最優秀選手賞を受賞した



女子の部 九州勢初の優勝!
西日本シティ銀行(本店)が
代表戦を制す

優勝◆西日本シティ銀行(本店)
久堀順子(23歳)、佐々木奈緒(22歳)、宮本麻由弥(26歳)、松野陽子(32歳)。監督 古賀裕章(54歳)



チーム \ 順	先	中	大	得点
西日本 シティ銀行 (本店)	久 堀	佐 々 木	宮 本	3
	☐	☒	☐×	4
パナソニック (ES守口)				0
	鈴 木	白 木 原	井 上	0

チーム	順	先	中	大	得点	代
パナソニック (ES東京本社)		竹之内	三好	佐藤	1	三好
	②			②	2	メ
全日本武道具 (熊本)		⊖		フ	2	
		西尾	興梠	姉川	1	興梠



▲先鋒、中堅と星を奪い合った両軍の戦いは代表戦へと持ち込まれた。選出されたのは両チームともに中堅。中堅戦では興梠に敗れている三好、この代表戦では腹をくくったか、思い切りの良いメンを興梠に打ち込んだ(写真は三好の攻め)



▲先鋒戦で1勝を奪った西日本シティ銀行は続く中堅・佐々木も見事な出ばな
メンを決めて一本勝ち(写真は攻防)。その後の大将戦も制した西日本シティ
銀行。完封勝利で決勝戦へとコマを進めた

社の決勝進出も今回が初のこと。この日チームの牽引役として活躍したのは麗澤瑞浪高校(岐阜)↓明治大学で活躍した三好。今春の入社を控えるこの三好を中堅に据えたチームが快進撃を遂げた。

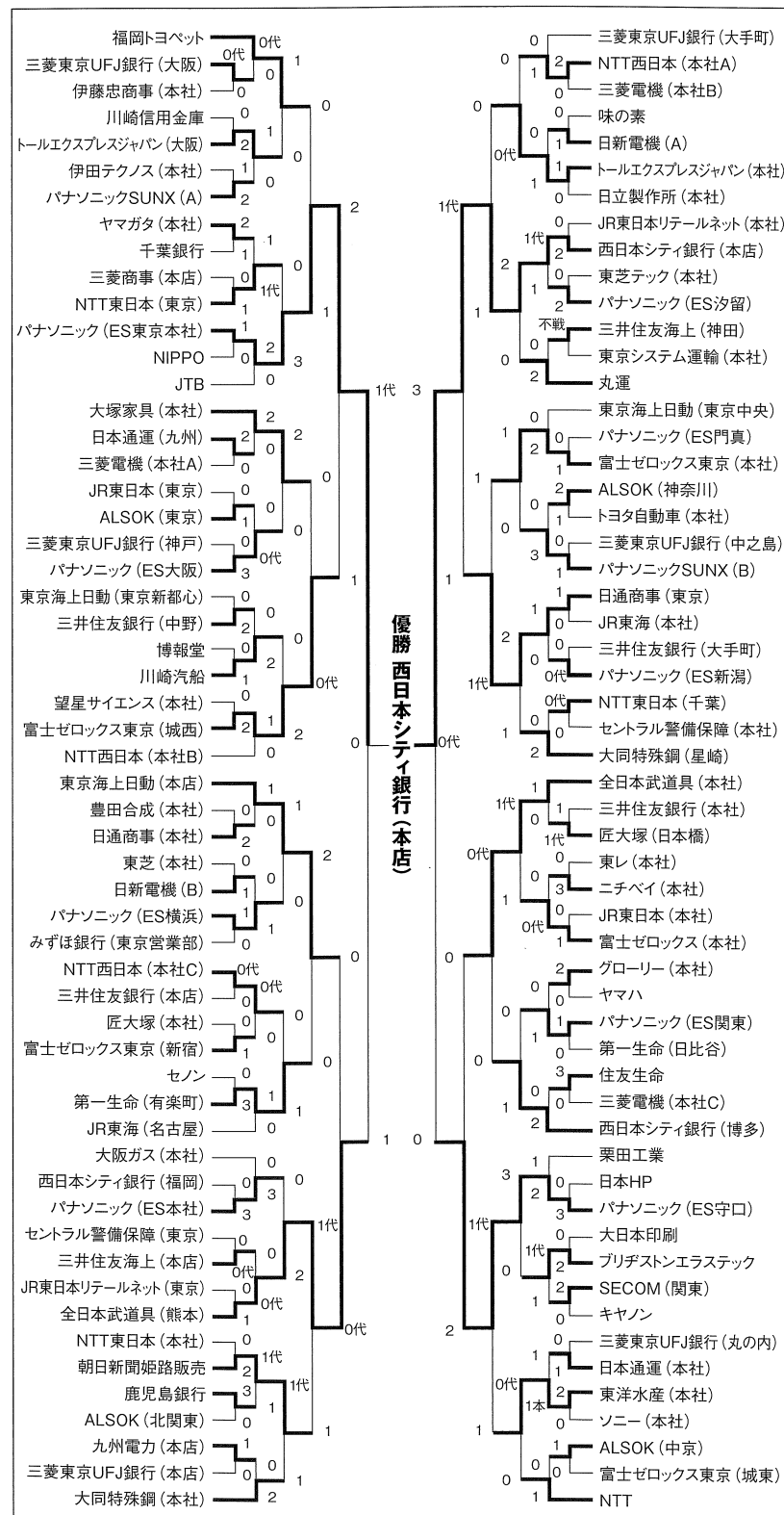
決勝戦は先鋒から大将まで引き分けとなり代表戦へともつれるも、西日本シティ銀行・宮本がこれを制して女王の座を奪取した。

西日本シティ銀行・古賀裕章監督は、「今回は優勝を狙って臨んだ大会なので結果が出て良かったです。代表戦となればやはり宮本ということは決めています。一回優勝すれば選手たちには『次も』という欲も出てくるでしょう。男女両方でまた日本一を狙っていきたいです」と優勝の喜びを語った。

▼先鋒引き分けの後の中堅戦、全日本武道具・興梠が先制するも対する敵尾も一本返して引き分け。大将戦も引き分けとなり、勝負は代表戦へ。全日本武道具・興梠、東京海上日動の大将・小山で争われた代表戦は興梠のひきメンで決着した(写真)



3位◆全日本武道具(熊本)
西尾明日菜(23歳)、
興梠舞(35歳)、
姉川恵里香(22歳)。
監督Ⅱ甲斐永吉(34歳)



初陣の金光(損害保険ジャパン日本興亜本社)に栄冠



決勝

金光(損害保険ジャパン日本興亜本社) ◎ — 阪下(日本精工)

▲今年出場権を得た金光がまっすぐなコテメンで口火を切る。阪下も出ゴテでいい機会をとらえる見せ場があったが、先制したのは金光だった。阪下の竹刀を制したところから放った鋭いコテが一本に(写真)。その後も鋭いメン技で攻めた金光が一本勝ちで優勝を決めた

準決勝

金光(損害保険ジャパン日本興亜本社) ◎ — 田代(清水建設)



◀惜しいコテ技で田代を脅かした金光。縁を切ることなく、メンを放てばこれが見事に一本となった(写真)。両者、激しい打ち合いを見せる中、金光のひきゴテもいいところをとらえる。田代が勝負をかけた片手メンは惜しくも届かず、時間終了となった

優勝◆金光俊和

(損害保険ジャパン
日本興亜本社・
40歳・五段)

五段以下の部
優勝・金光俊和

40歳以上の実業団剣士327人がエントリーした五段以下の部を制したのは金光俊和(損害保険ジャパン日本興亜本社)だった。西大寺高校(岡山)↓法政大学という経歴を持つ金光は今回が高壮年大会初出場となる。最年少の40歳という若さを活かしてスピードで相手を圧倒。決勝戦ではこちらも初の決勝進出となる阪下(日本精工)をコテの一本勝ちで下してデビュー戦にして大会の頂点にまで駆け上った。

決勝戦へ向けての意気込みについては、「もう六段取得を目指して稽古に取り組んでいるので、六段に見合った落ち着いた剣道を、という思いで臨みました」と振り返った金光。初の高壮年大会を経験し、

「やはり日頃から稽古を重ねていないとこれだけの人数が参加するトーナメントを勝ち上がるのは体力的にも非常に大変ですね」と感想を述べる。

現在、稽古は週に1回程度。稽古場所



準々決勝

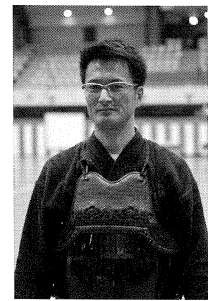
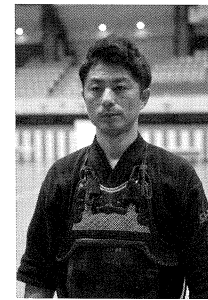
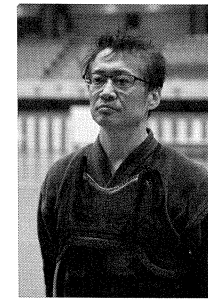
田代(清水建設) ◎ — 渡邊(損害保険ジャパン日本興亜本社)

▲試合開始から積極果敢な攻めを見せていたのは田代。一方の渡邊はなかなか機会を見いだせない様子。終始攻め続けた田代がメンに跳べば、この技が居着いた渡邊を見事にとらえた(写真)

準々決勝

金光(損害保険ジャパン日本興亜本社) ◎ — 村木(凸版印刷本社)

▶ともに40歳。好調な村木に対して金光がワンチャンスをとらえた見事なコテを先制(写真)挽回を図る村木にも惜しいコテやメンが見られたが、金光は集中を切らさず残り時間をしのぎきった

2位◆阪下健作
(日本精工・51歳・五段)3位◆田代浩平
(清水建設・46歳・五段)3位◆今野伸浩
(三菱東京UFJ銀行
本店・52歳・五段)

は新宿にある本社ビル内の自社道場だという。「その道場を利用して会社の仲間たちと日々切磋琢磨しています。今回の優勝は大変うれしい結果ではあるのですが、今度は六段以上の部でぜひ上位に勝ち上がってみたいと思います」優勝の喜びとともに、新たなステージでの目標を語った。

優勝◆立見顕久(三井住友海上火災・44歳・七段)

高壮年六段以上の部
立見(三井住友海上火災保険)が記録更新

大会史上初の連覇(平成25年・第16回、翌26年・第17回)を成し遂げている立見顕久(三井住友海上火災保険)が、最多優勝記録の更新となる3回目の優勝を果たした。今回も598人もの選手がエントリーしていたが、この規模の個人戦を三度も制するのは並大抵のことではあるまい。現役時代より実績豊富な立見だが、年齢を重ねて益々集中力に磨きがかかったと言えようか。

「出場するからには優勝を狙っています」

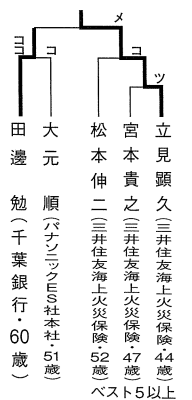
だが、それでも『まさか』という思いはあります

と優勝の感想を語った立見。決勝戦、上段の田邊(千葉銀行)との戦いについては、

「当社には上段の宮本(貴之)先輩がいらっしゃるので、常日頃から先輩に鍛えていただいているんです。宮本先輩より強い上段はいないと信じて、田邊さんにひたすらかかっていきました」と振り返った。

現在、立見は自身の郷里でもある兵庫県へと転勤。今年は兵庫代表として全日本都道府県対抗大会への出場も決定している。

「(都道府県大会への出場は)自分にとって大きな励みとなりました。かつて京都代表として2回出場して、今回は兵庫県から3回目の出場です。チームに迷惑かけないように、むしろチームを牽引できるようにがんばりたいと思っています」

六段以上の部
優勝・立見顕久



準決勝

立見(三井住友海上火災保険) ⊖ 松本(三井住友海上火災保険)

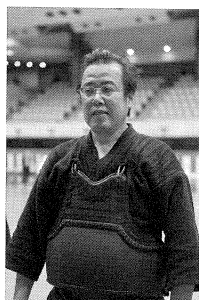
▲同門対決となった準決勝。過去2回の優勝経験がある立見に対して、先輩の松本は3位入賞経験がある。立見の手元の浮きにコテを狙う松本だったが、立見はこれに返しメンで対応する。最後の一手は立見のコテ(写真)。松本の手元を崩して見事に打ち込んだ



決勝

立見(三井住友海上火災保険) ⊗ 田邊(千葉銀行)

▲上段の田邊に対して積極的に技を放っていく立見。スピードとパワーで圧され気味の田邊が片手メンに伸びるも、これは立見も構えを崩さず制する。勝負の一打は立見のメン。田邊得意の片手ゴテを誘い、その打ち終わりをメンに打ち取った(写真)



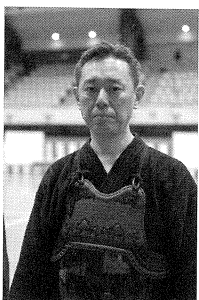
2位◆田邊 勉
(千葉銀行・60歳・六段)

▶田邊は昨年3位入賞、大元は過去に2位入賞と、両者上位進出経験がある。上段の田邊に対して大元は手元を高め、据えて対峙するが、田邊が初太刀の片手ゴテを一本とする(写真)。その後、大元も意地を見せて一本返すが、延長戦では再び田邊のコテが炸裂した

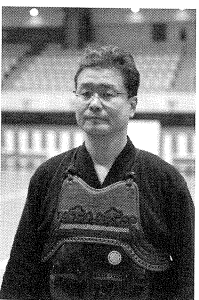
7回戦

田邊(千葉銀行) ⊖ メー 張貝(キリン)

▼開始ほどなく上段から片手ゴテを先制したのは田邊だった。早めに一本を返しておきたい張貝だったが、田邊は堂々の構えを崩さず、機会をとらえた片手メンを追加した(写真)。田邊が準決勝進出を決めた



3位◆松本伸二
(三井住友海上火災保険・52歳・七段)



3位◆大元 順
(パナソニックES
本社・51歳・七段)

準決勝

田邊(千葉銀行) ⊖ コーコ 大元(パナソニックES社本社)



7回戦

松本(三井住友海上火災保険) ⊖ 吉村(パナソニックES社本社)

▶ともに強豪チームの主力として活躍してきた実力者同士。両者のジリジリとした間合の攻防から試合場には緊迫感がただよう。序盤、審判の旗を一本上げさせた松本が鋭いコテを打ち込み一本先制(写真)。その後、試合時間終了を迎えた

